

# 初年次教育（リメディアル教育）

---

教学IRをきっかけとする教育改善の事例

鈴鹿医療科学大学 IR推進室

# 初年次教育（リメディアル教育）

## 【改善のきっかけとなるIRデータ】

- 重回帰分析を用いて入学早期の教学指標による1年前期のGPAを予測。  
→ある程度予測可能。
- ロジスティック回帰分析を用いて1年前期GPAと入学早期の教学指標による国家試験ストレート合格の予測。  
→1年前期の段階で、低リスク群と高リスク群の判別が可能。
- 決定木分析を用いた1年前期、2年後期のGPAから修業年限内卒業の予測。  
→高リスク群であっても2年後期GPAの成績がある程度高ければ、修業年限内卒業の成功率が高くなる傾向。



初年次～2年次の教育的介入で成功確率を高められる可能性が示唆された。

## 【具体的な教育改善例】

初年次教育についてのIRデータは“予測”の域を出ず、介入方法によっても効果が異なる可能性があったが、介入後に効果判定をすることとして実施。

### 全学リメディアル教育（薬学部を除く）（2014年～）

- ・プレースメントテストで高リスク群を同定し、1年生前期に課外授業として実施。
- ・各学科の要望により、数学、物理、化学、生物、国語など。
- ・正規科目ではなく、講師料等は学生の利用者負担。

### 薬学教育センター設置（薬学部）（2020年～）

- ・3人の教育専任教員が1年生全員を対象に化学、物理、生物を正規必修科目として担当。
- ・授業においては、小テスト等での高リスク群に対し、毎週補習。
- ・「特別教育」にも関わらず前期定期試験を不合格となった学生は、後期にも同じ授業を半年間履修。後期の定期試験で再度、合否を判定。
- ・薬学部独自の対面指導をとり入れた入学期前教育を実施。

# 【教育改善結果：全学リメディアル教育】

## 全学リメディアル教育の効果判定

受益者負担の課外授業として実施され、最後まで参加を継続する学生がいる一方で、途中で出席しなくなる学生も多い。データ上、最後まで参加した学生は脱落した学生と比べて、その後のGPAが良好であるというデータが得られた。しかし、この結果が教育効果なのか、学生のまじめさを識別しているだけなのか不明である。

## 効果判定：不明

## 全学リメディアル教育に対する各種の問題点

- ・全学的なリメディアル教育は、単位化されていないことや正課への有効性が不明確なため、学生のモチベーションが低い。
- ・教員の適性差や学生の習熟度・学科ごとの差が大きく、一律の講義形式では対応が難しい。
- ・学生の習熟度に応じた支援や、プレースメントテストによる対象者選定にも課題がある。



全学リメディアル教育の見直しを検討・試行（2024年～）

## 【教育改善結果：薬学部初年次教育】

- ・薬学部は2020年から、近県大学の薬学部開設に伴い定員割れが始まり、プレースメントテストの成績分布は低得点層の割合が増えた。しかしながら、1年前期GPAは2019年以前よりも向上した。
- ・2020年には新型コロナウイルス感染拡大により遠隔授業が全面実施され、成績の低下が懸念されたが、2020年度入学生の2年後期（専門科目中心）のGPAの分布は低下せず、2019年以前よりも向上した。  
→2年後期GPAの上昇は、教育センター以外の専門科目教員の教育改善努力の効果とも考えられるが、初年次教育の効果が2年生以後の成績にも効果を及ぼした可能性も大きいと考える。

### 効果判定：非常に有効

入学生の習熟度低下にも関わらず、導入以前よりも成績を向上させ、それ以降の成績にも好影響を与えている。